

# けるくるーる

きょうはなにいろっ

こぎんとこぎんのある生活をたのしもう

第7号

発行:こぎん刺し 絵糸

2014/7/26

<http://kogin-eito.com/>

## 季節のぜいたく

### ⑦ 水菓子

甘やかにジューシー。夏の元気のもと。

梅雨が明け、夏の太陽に蝉がジイジーという季節がやってきた。暑い夏、なにより嬉しいのは水菓子である。

「菓子」とつくから、水ようかんやゼリーのことかと思う方もいるかもしれないが、それは最近に生まれた使い方。この言葉はもともと果物を指す。昔の人には、新鮮な果物の甘さこそが立派なおやつだったからだ。

夏の果物には水分がとて多い。ひとくち齧ると水分が果汁となっていた。口に入ればつるりとくずれ、暑い日差しにさらされ焼かれた私たちの喉に、極上の甘露をほぐす。濃厚な香りに励まされ、うだる暑さに負けそう

身体がもういちど元気を取り戻すのが実感できる。

太陽を燦々と浴びているから栄養も豊富だ。西瓜には、リコピン、カリウム、システイン。桃にはカリウムだけでなく食物繊維もたっぷり。マンゴーにはビタミン類、パイナップルにはプロメリンというたんばく質分解酵素。つまり、体の機能を調節し、食欲増進、美肌やアンチエイジングなど、夏の厳しい暑さや紫外線に対抗するためのパワーが沢山含まれている。旬の美味しい果物を食べることが夏バテ防止につながるというわけだ。

\*\*\*\*\*

さてある夏、用事を済ませた帰りに、偶然に一軒の果物屋を見つけた。よくある店先のつくりだが、違うのは、店のおもて一面をごろごろ大きな西瓜が占めていること。三十個もあるだろうか。板で無造作に段差をつけた上を、とこ

ろ狭しと緑と黒のシマシマが覆っている。驚いた私は思わず車を止めて近寄っていったのだが、店には誰もいない。しかもこんなに広がっているのに、値段も書いてない。奥の店主の家らしき部分へ続けたときはあるのだが、人影がない。声をかけてもシーンとしている。

あまりに珍しい光景なので立ち去り難く、西瓜を眺めては圧倒されていると、暫くして古ぼけた自転車の音がした。白髪まじりのお爺さんが危なげに乗っている。キーコキーコとやってきたその人は店の横でよろりと降りて、「いらっしやい」となんとも呑気な声で挨拶してきた。近所の人かと思いきやどうやら店主のようだ。

「あのう、西瓜ひとつください。」と恐る恐る言うのと、はいよ、と手慣れた様子で赤白のビニールひもを取り出しながら尋ねられる。「どれがいいの?」

ど、どれがと言われても……こんなにある中から選ぶのは難しい。近くの名産地のものだろうか。スーパーで見るより断然安い

うえ、新鮮そうにパツパツと張った皮を見ると、どれを選んだって間違いなく美味しそう。

長考の末、店主が「これなんて様子がいんじゃないの?」と勧めてくれた、丸々とした一個に決めた。彼はそれを、先ほどの赤白ヒモでぐるりと包み、慣れた手つきでしゅしゅしゅと結んで、あつという間に見慣れた西瓜の手提げスタイルに仕上げていく。第一印象からは想像もつかない格好の良さだ。すっかり嬉しくなつて代金を払おうとすると、店の奥から黄色い糸ウリを持ってきて、「これおまけね」という太っ腹。美味しい食べ方まで教えてくれたのだった。

帰りは積み込んだ西瓜が車内を転がらないように慎重に運転した。手に入れた西瓜が素晴らしい美味さだったことは言うまでもない。

《おまけ・夏の果物の目利きのポイント》

西瓜：お尻部分の白いところ（花落ち）が小さく、へこんでいない。ヘタの周りがぐっと盛り上がっている。縞が

くつきり見える。

桃………ピンクや黄が濃く美しい色。産毛

がふんわり。かぐわしい香り。

全体に果点が散らばっている。

ぶどう……粒がそろってハリがあり、表面に

白い粉がふいている。

メロン……網目が均一で盛り上がっている

もの。皮の色が均一なもの。ずつ

しり重いもの。

マンゴー……皮に艶とハリがあり、赤やオレ

ンジが混じっているもの。

どんな果物も、ヘタや枝が新しく、見た目が

整って美しい丸みや対称性があるものは、栄

養もまんべんなくいきわたっていて美味だそ

うです。



モドコ・アレコレ

⑥のこぎりの歯

ギザギザは 古来続く魔よけの模様。

今回のモドコは「のこぎりの歯」。つなげて刺すことで、名前そのままにギザギザとラインが出来ていきます。縦に線をつなげてもよし、矢印のように横に数目あけて連続させていくと、リボン状に配置することもできます。ま

た沢山ならべて使うと、なんともエキゾチックな雰囲気になります。



縦につなげたり



横につなげたり

日本の伝統文様には、のこぎり

の歯のようにギザギザしている形や三角形の連続模様のことを指す、「鋸歯文(きよしもん)」というのがあり、古くは弥生時代の銅鐸や銅鏡にも刻まれたといいます。世界的にも民族的な柄として使われていて、インドやインド

ネシアの織物の美しさから、のちに日本の着物や帯の柄としてもとりいれられ、一般的になっていきました。もともとは、悪いものをよせつけないための柄として配されることが多かったようです。

こぎん刺しの幾何学的な柄にとっても馴染みのよい柄ですし、着る人のことを思って刺す、という成り立ちを考えると、よく使われることに納得ですね。

7月の一句

日差し、ときどきノスタルジィ。



井戸水で西瓜なでつつ

冷えるのをまつ(実)

のどが渴いたとき、必ずひねる蛇口があった。汲めばガラスのコップがくもるほどキーンと冷えた井戸水がでるから。

その蛇口を弱めに開け、西瓜が逃げていかなないように桶に入れて真下に置く。水にゆられて、濃い緑の表面が、透明な

リボンでなでられているようにキラキラと見える。大きな西瓜を丸ごとひやす

のには随分時間がかかったけれど、あれは、半日ほどだったろうか。

そうして自然に冷えていった西瓜は、冷蔵庫にいられたときよりも、心なしか甘

く感じたものだ。



夜と下駄

友人との久々の旅行で温泉を訪れた。そこでは、チケットがあれば湯めぐりができるといふ。そ

れならと浴衣に羽織を着て、夜の温泉街を歩くことにした。

玄関で宿の下駄を借りて、赤い鼻緒に指を掛けていると、子ども時代の祭りの夜を思い出した。一年間薄紙に包んでしまっていた下駄を箱から取り出して玄関に置くと、コン、という硬質な音がした。

大人になってはく下駄にも、あのころと変わらずおのずと心が躍る。二、三度確かめるように足踏みすると、暗い夜道には足音がやけに響くように感じられて、おっかなびっくり温泉街の坂を下りていった。道の両脇には、土産物をおつめた商店も今はひっそりしている。少し通りをそれたスマートボールの店には、蛍光灯の下で懐かしそうに遊びに興じるお客さんの姿。こじんまりした温泉街の静かな夜の顔。

下駄がもたらす非日常感にすっかり気分を良くした私たちは、風呂上がりにアイスを買って帰ったのだった。

《編集後記》 まるで西瓜号。青森県のゆるキャラ「つながるちゃん」も、西瓜をかぶっていて最近よく見かけます。